

教室(診療科)紹介 (83)

小粒でもぴりりと辛い教室をめざして

眼科学講座 (大橋)

教授：富田剛司
 講師：八木文彦
 北善幸
 医局長：榎本暢子

医局員は上記以外に、助教2名、シニアレジデント5名、レジデント3名。

眼科指導医の資格を3名の医師がもっており、医局員の指導を行っている。現在、産休中の医師が3名いるため、忙しい日々が続いているが、医局員一同協力し、外来や手術を行い充実した時間を送っている。また、2013年の第24回日本緑内障学会学術集会の学会長に富田が任命されており、その準備で忙しくなっている。

診療内容

大橋病院では2007年より3代目教授の富田が教室運営を行っている。代々の教授の専門が網膜硝子体疾患であったこともあり、これまで同症を中心に診療がなされてきたが、さらに、富田の専門である緑内障が追加された。大橋病院の近隣には数多くの大学病院や大病院が存在するため専門性を打ち出す必要があり、当科では緑内障、網膜硝子体疾患を臨床の2大柱としている。緑内障の手術件数は年間約200近くと有数の多さを誇っている。今年から、緑内障インプラント手術も認可され、より手術件数が増加することが予想される。網膜硝子体疾患では裂孔原性網膜剥離などの緊急疾患が多く、開業医の先生の紹介に対応できるようにスタッフを配置しており、夕方、外来が終了後に手術が開始されることもしばしばある。大橋病院は中規模病院であり、紹介患者だけでなく近所の患者さんが開業医を受診するような気楽さで外来受診することも多々あり、数多くの患者さんで外来が非常に込み合った状況である。フレンドリーに対応することを心がけながら、開業医の先生



医療センター大橋病院眼科のスタッフ
 前列左より 榎本医局長、竹山助教
 後列左より 八木講師、富田、北講師



第4回大橋オフサルモロジー研究会における集合写真
 前列左より 石田教授(帝京大学溝口病院眼科 当教室OB)、戸張名誉教授、富田、石橋教授(九州大学医学部眼科 日本眼科学会理事長)、竹内客員教授、新家東大名誉教授(関東中央病院院長 日本緑内障学会理事長)、八木講師

との病診連携の取り組みとして患者さんの“逆紹介”を積極的に行っている。

研究

臨床のスキルを上げるのは当然であるが、それに加え、大学の教室としての研究活動も重要である。医局員にはそれぞれにテーマを与え積極的に研究発表するよう指導している。緑内障では3次元画像解析を用いた臨床研究を行っており、国内外に東邦大学発のデータを提示している。また、網膜硝子体疾患では特発性黄斑円孔に対し、いままで

不可欠であった術後のうつ伏せ姿勢をなくす取り組みをしており良好な成績を取めている。これらの成果は、徐々に、インパクトファクターが高い学術誌にも採用されるようになり励みを感じている。また、2期連続で科学研究費補助金（科研費）にも採択され、現在の研究活動が認められてきていると実感している。

地域連携への取り組み

地域連携行事として東邦大学第2眼科と渋谷区・目黒区・世田谷区眼科医会合同勉強会や眼科病診連携症例検討会を、初代の戸張教授の時代から続けており、地域の開業医の先生方と積極的に連携を取っている。それらに加え、大橋オプサルモロジー研究会という新しい研究会を立ち上

げ、全国から著名な眼科研究者を講師として招聘し、病診のみならず、地域総合病院の若手にも勉強の場を提供することにより、大橋病院眼科を中心とした病病連携にも力を入れ始めている。

おわりに

“山椒は小粒でもぴりりと辛い”，をモットーとして、小さい教室ではあるが、眼科分野において一目を置かれる存在をめざして、これまでのお二人の大教授（戸張名誉教授、竹内容員教授）の名を汚さぬよう努力していこうと、気持ちを新たにしている。

（教授：富田剛司）